

第 50 回世界平和の日教皇メッセージ

(2017 年 1 月 1 日)

「非暴力、平和を実現するための政治体制」

1. 新年の初めにあたり、わたしは世界中の民族と国民、諸国政府の指導者、そして諸宗教と市民社会のさまざまな分野の責任者の皆さんに、平和へのわたしの切なる願いを伝えます。わたしはあらゆる大人と子どもに平和が訪れるよう望んでいます。そして一人ひとり人間に刻まれた神の似姿により、わたしたちが互いを限らない尊厳を与えられた神聖なたまものとして認め合うことができるよう祈ります。とりわけ争いにまみれた状況の中で、「尊厳への深い敬意」(1)を抱き、積極的な非暴力に基づく生き方を実践しましょう。

本書は第 50 回世界平和の日のメッセージです。第 1 回世界平和の日に、福者パウロ六世はカトリック信者だけでなくすべての人々に断言しました。「(野心に満ちた国家主義の緊張でもなく、暴力による征服でもなく、間違った市民社会をもたらす抑圧でもなく)、平和こそ人類の発展のために必要な唯一の」道です。そして次のように警告しました。「次に、国際間の紛争は、人間の思慮ある方法では解決できないと信じ込む危険です。つまり人間の権利や、正義や、公平に根ざした試みでは解決できず、殺人的な力だけでしか解決できないと信じ込む危険です」。そして自らの前任者である聖ヨハネ二十三世の回勅『パーチェム・イン・テリス——地上の平和』を引用しつつ、「真理と正義と自由と愛に根ざした平和の認識と、平和への愛」(2)をたたえました。50 年を経た今も、これらのことばはその重要性和緊急性を失っていません。

わたしはこの機会に、平和を実現するための政治体制としての「非暴力」について、熟考したいと思います。そして、わたしたちの個人的な思考と価値観の根底で、非暴力が育まれるよう神の助けを願い求めます。人と人とのかかわり、社会における関係、さらには国際的な関係において、愛と非暴力に基づく交わりが行われますように。暴力の犠牲者が報復という誘惑に耐えるとき、その人は非暴力に基づく平和構築のもっとも確かな担い手になります。地域的、日常的な局面から国際的な秩序に至るまで、非暴力がわたしたちの決断、わたしたちの人間関係、わたしたちの活動、そしてあらゆる種類の政治の特徴となりますように。

壊れた世界

2. 前世紀は、二つの世界大戦により破壊され、核戦争の脅威にさらされ、数知れない紛争に見舞われました。しかし悲しいことに、わたしたちは今、「散発的な世界大戦」に直面しています。現代社会がこれまでの社会よりも多少なりとも暴力的かどうかを判断するのは

容易ではありません。また、現代を特徴づける最新のコミュニケーション手段と移動性の向上は、暴力に対する認識を高めているのか、それとも暴力に慣れさせているのかを判断するのも簡単なことではありません。

いずれにせよ、「散発的な」暴力がさまざまな手段や領域で行われているために、はかりしれない苦しみが生じています。たとえば、さまざまな国や大陸で行われている紛争、テロ、犯罪、予測できない武力行為、移住者や人身売買の犠牲者に対する虐待、さらには環境破壊などです。こうした事態はどこに向かうのでしょうか。暴力によって永遠に価値のあるものを獲得できるのでしょうか。それとも報復行為を引き起こし、少数の「軍人」だけに利益をもたらす殺し合いの連鎖を生むだけなのでしょうか。

暴力はこの壊れた世界に対する解決策ではありません。暴力に対する暴力の応酬がもたらすのは、強制移住とはかりしれない苦しみだけです。なぜなら莫大な資源が若者、苦境にある家庭、高齢者、病者をはじめとする世界の大半の人々の日々のニーズを満たすために費やされずに、軍事目的のために使われるからです。最悪の場合、すべての人とはいわないまでも、多くの人々に身体的、精神的な死がもたらされます。

福音

3. イエスご自身も暴力に満ちた時代に生きていました。しかし、暴力と平和が遭遇する真の戦場は人間の心であると、イエスは教えています。「中から、つまり人間の心から、悪い思いが出て来るからである」(マルコ 7・21)。しかしこうした現実に対して、キリストのメッセージは、非常に前向きな対応策を示します。イエスは神の無条件の愛、受け入れてゆるす愛をつねに説きました。そして敵を愛し(マタイ 5・44 参照)、もう一方のほおをも向けるように(マタイ 5・39 参照)弟子たちに教えました。姦通の現場で捕らえられた女に告発者たちが石を投げるのをやめさせたとき(ヨハネ 8・1-11 参照)、またご自分の死の前夜に、ペトロに剣を納めるように言ったとき(マタイ 26・52 参照)、イエスは非暴力の道を描いていました。イエスはその道の行き先である十字架まで進み、それにより平和を実現し、敵意を滅ぼしました(エフェソ 2・14-16 参照)。イエスの福音を受け入れる人はだれでも自分自身の中に暴力があることを認め、神のいつくしみによっていやされ、それにより今度は自分が和解の道具になります。アシジの聖フランシスコのことばにある通りです。「口で平和を告げるように、あなたたちの心にはそれ以上に大きな平和があるようにしてください」(3)。

今、イエスの真の弟子であることは、非暴力というイエスの提案を受け入れることでもあります。わたしの前任者であるベネディクト十六世が述べたように、「イエスの提案は現実的なものです。なぜならそれは、世界の中に『あまりにも大きな』暴力と『あまりにも

大きな』不正があること、ですから、『より大きな』愛、『より大きな』いつくしみをもって対抗しなければ、このような状況を克服することはできないことを考慮に入れているからです。この『より大きな』ものは神から来ます」(4)。さらに次のように強調しています。「ですから、キリスト信者にとって非暴力は単なる戦術的な行動ではなく、人格のあり方だということが分かります。それは神の愛とその力を確信する人の態度です。このような人は愛と真理という武器のみによって悪に立ち向かうことを恐れないからです。敵への愛は『キリスト教の革命』の核心です」(5)。敵を愛するよう求める福音(ルカ6・27参照)は、とりわけ「キリスト教の非暴力の『憲章』と考えてよいものです。キリスト教の非暴力とは、悪に屈することではなく、……むしろ、善をもって悪に対抗することです(ローマ12・17-21参照)。こうして不正の鎖を断ち切ることができます」(6)。

暴力よりはるかに強い

4. 多くの場合、非暴力は降伏すること、かかわらないこと、受け身であることとして理解されますが、実際はそうではありません。マザー・テレサは、1979年にノーベル平和賞を受賞した際に、積極的な非暴力に関するメッセージをはっきりと伝えました。「わたしたちの家庭には、爆弾や銃は必要ありません。平和のために破壊すべきではありません。ただ一緒にいて、互いに愛し合ってください。……そうすれば世界のあらゆる悪に打ち勝つことができます」(7)。武器の力は人をあざむくからです。「武器商人が着々と取引を進める中で、貧しい平和の働き手は一人の人を助けるために、そしてさらに別の人を次々に助けるためにいのちがけで活動しています」。そうした働き手にとって、マザー・テレサは「現代の象徴であり、アイコンです」(8)。今年の9月、わたしは深い喜びをもってマザー・テレサの列聖を宣言し、彼女があらゆる人のために尽くしたことをたたえました。マザー・テレサは「生まれなかった子ども、世間から見捨てられ無視された人などの人々のいのちを受け入れ、守ることを通して、あらゆる人のために尽くしました。……衰弱し路上で死にかけている人々の前に彼女はかがみこみ、彼らの内に、神がお与えになった尊厳を見ました。そして、この世の権力者の前で声を上げ、貧困を生み出すという犯罪による罪——まさに罪です——を負っていることを彼らに自覚させようと思いました」(9)。こうした状況に対する彼女の使命は——彼女は何千、何百万もの人々の立場に立っていました——、苦しんでいる人のもとに出かけ、自らを顧みずに献身的に尽くし、傷ついたからだに触れて介抱し、ずたずたにされたいのちをいやすことでした。

非暴力を断固として貫く行為は、驚くべき結果をもたらしました。インド独立におけるマハトマ・ガンディーとカーン・アブドゥル・ガッファール・カーンの功績と、人種差別と戦ったマーティン・ルーサー・キング・ジュニア牧師の偉業が忘れられることは決してないでしょう。とりわけ女性は、しばしば非暴力の指導者になります。たとえば、レイマ・ボウイと何千人ものリベリアの女性たちは、集団で祈りながら非暴力の抗議運動を行い、

その結果、上層部の和平交渉が合意に達し、リベリア第2次内戦が終結しました。

また欧州での共産党政権の崩壊によって幕を閉じた、波乱に富んだ10年間のことも忘れることはできません。キリスト教共同体は絶え間なく祈り、勇気ある行動をとることによって、独自の貢献をしました。とくに聖ヨハネ・パウロ二世の行動と教えには影響力がありました。彼は1991年に公布した回勅『新しい課題』の中で1989年の出来事を振り返り、「もっぱら真理と正義という武器にのみ頼る平和的抵抗によって」(10)、人々の生活と国と政府が大きく変わったという事実に焦点を当てました。この平和的な政権移行は、いわば「いかなるときも権力に屈することを拒みながら、真実をあかす実効的な方策を探り続けた人々の、非暴力的なかかわりによって」実現しました。ヨハネ・パウロ二世はさらに次のように締めくくりました。「人々が、内戦や国家間の戦争において階級闘争を放棄し、暴力に頼らずに正義を求めて闘うことを学びますように」(11)。

教会は、公正で永続的な平和を築くために多くの国で非暴力に基づく平和活動を行い、もともと暴力的な勢力ともかかわってきました。

不正義と暴力の犠牲者のためのこれらの活動は、カトリック教会だけに受け継がれたものではなく、多くの宗教が独自の伝統として行っています。「あわれみと非暴力は生き方の指標となる本質的な要素だからです」(12)。わたしは再び強く断言します。「宗教はテロリストではありません」(13)。暴力は神の名をぼうとくします(14)。次のように絶えず繰り返し唱えましょう。「暴力を正当化するために神の名を使ってはなりません。平和だけが聖なるものです。戦争ではなく、平和だけが聖なるものです」(15)。

非暴力に基づく政治の根源となる家庭

5. 暴力の源が人の心の中にあるとすれば、なによりもまず家庭内で非暴力を実践することが根本的に重要です。それは、今年の3月にわたしが使徒的勧告『愛のよろこび——家庭のよろこび・教会のよろこび』の中に記した、愛のよろこびの一環です。この使徒的勧告は、結婚と家庭について教会が2年間、考察を重ねた末に発表されました。家庭は夫婦や両親、子ども、兄弟姉妹が互いにコミュニケーションをとり合い、相手を心から思いやることを学ぶことのできる、必要不可欠な場です。家庭内の摩擦や争いは、力ではなく、対話、敬意、相手の幸せを思いやる心、いつくしみ、そしてゆるしによって解決されなければなりません(16)。愛のよろこびは、家庭の中から世界にあふれ出て、社会全体を照らします(17)。一方、個人の間と諸国民の間に兄弟愛と平和的共存を求めるという倫理は、恐怖と暴力と閉鎖性に根差した考え方ではなく、責任感と敬意と誠実な対話に基づくものです。したがって、わたしは軍縮を求めると同時に、核兵器の禁止と廃止を訴えます。核抑止力と相互確証破壊*の脅威は、こうした倫理の根拠にはなりえないからです(18)。わた

しは同様の緊急性をもって、家庭内暴力と女性と子供に対する虐待をやめるよう強く求めます。

11月に閉幕したいつくしみの特別聖年は、自分自身の内面の奥底を見つめ、そこに注がれる神のいつくしみを受け入れるよう、わたしたち一人ひとりを促しました。この聖年は、どんなに多くの、そしてどんなに多様な人々や社会的グループが無関心な扱いを受け、不正義と暴力のために苦しんでいるかを認識するよう、わたしたちを導きました。彼らもわたしたちの「家族」の一員であり、兄弟姉妹です。非暴力に基づく政治は家庭で始まり、人間家族全体に広がっていかねばなりません。「リジューの聖テレジアは、愛の小さき道を実践すること、また優しいことばをかけ、ほほえみ、平和と友情を示すささやかな行いのあらゆる機会を逃さないようにと、わたしたちを招いています。総合的なエコロジーはまた、暴力や搾取や利己主義の論理と決別する、日常の飾らない言動によってもできています」(19)。

わたしからの呼びかけ

6. 積極的な非暴力による平和構築は、道徳的な規範を適用することによって武力行使を抑制するという、教会の絶えざる努力に終始、欠かせない要素です。教会は国際機関の活動に参加することを通して、またあらゆる分野の法律の草案を作成している多くの信者の的確な貢献を通して、平和構築のために尽くしています。イエスご自身は、平和を構築するための「手引き」を山上の説教の中で与えています。真福八端(マタイ5・3-10参照)は、祝福された人、幸いな人、真正な人として示された人の姿を描いています。柔和な人、あわれみ深い人、平和を実現する人、心の清い人、義に飢え渴く人は幸いであると、イエスはわたしたちに語りかけています。

政府と諸宗教の指導者、国際機関の責任者、そして世界中の企業とメディアの幹部にとって、それぞれが責任を託された職務に真福八端を適用することは計画であると同時に挑戦です。また、平和の働き手として活動しながら、自らが任された社会、共同体、企業の発展に貢献することは一つの挑戦です。それは人々を見捨てたり、環境を破壊したり、是が非でも勝利を得ようとしたりすることを拒むことを通して、いつくしみを示すことです。そのためには「対立に耐えてそれを解決し、新しい道りの連なりへと、それを変貌させる」(20) が必要です。そうした行動は歴史を築き、友愛に満ちた社会を形づくる方法として、連帯を選びとることを意味します。積極的な非暴力とは、一致が対立よりもはるかに力強く、実り豊かなものであることを表す一つの方法です。世界中のあらゆるものはつながっているのです(21)。相違により摩擦が生じることは確かです。しかしそれらに対し、建設的で非暴力的な姿勢で向き合みましょう。そうすれば「対立する両極がもつ豊かで有益な潜在能力」を維持したまま、「緊張や抵抗の場に、多様性の一致を実現」(22)す

ることができるでしょう。

わたしは積極的で創造的な非暴力のもとに行われる平和構築のあらゆる取り組みに、教会が協力することを誓います。2017年1月1日には、「人間開発のための部署」**が新たに活動を開始します。この部署は、教会が「正義と平和と環境保護というはかりしれない善」をもっとも効果的な方法で促し、移住者、「困窮している人、病者、疎外された人、社会の周縁に追いやられた人、武力紛争と自然災害の犠牲者、受刑者、失業者、あらゆる種類の奴隷制や虐待の被害者」(23)のことを思いやる助けとなるでしょう。その活動の一つひとはささやかなものですが、暴力のない世界を築くために役立つ、正義と平和に向けた第一歩となるでしょう。

結論

7. これまでの慣例に従い、わたしは無原罪の聖マリアの祭日である12月8日にこのメッセージに署名しました。マリアは平和の元后です。御子がお生まれになったとき、天使は神を賛美し、地上と善意の人に平和があるよう望みました(ルカ2・14参照)。マリアがわたしたちを導いてくださるようお願い求めましょう。

「わたしたちは皆、平和を求めます。多くの人がささやかな身振りや行いによって、日々、平和を構築しています。そうした人々の多くは、苦しみながらも、平和の働き手となるために根気強く努力し続けています」(24)。2017年にあたり、わたしたちが自らの思い、ことば、行いから暴力を消し去って非暴力の人となり、自分たちの共通の家を大切にす非暴力的な共同体を築くために、祈りと活動を通して尽力することができますように。「祈りのうちに神に向かえば、できないことはありません。だれもが平和の作り手になれるのです」(25)。

バチカンにて
2016年12月8日
フランシスコ

(注)

1. 教皇フランシスコ使徒的勧告『福音の喜び』228
2. 教皇パウロ六世「第一回世界平和の日メッセージ」1968年1月1日
3. 「三人の伴侶による伝記」(アシジの聖フランシスコ伝記資料集1469〔フランシスコ会日本管区訳・監修 『アシジの聖フランシスコ伝記資料集』教文館])
4. 教皇ベネディクト十六世「お告げの祈りでのことば」2007年2月18日
5. 同

6. 同
7. マザー・テレサ「ノーベル平和賞受賞スピーチ」1979年12月11日
8. 「平和の道」に関する考察、サンタ・マルタ館聖堂、2015年11月19日
9. コルカタのマザー・テレサの列聖式ミサ説教、2016年9月4日
10. 教皇ヨハネ・パウロ二世回勅『新しい課題』23
11. 同
12. 「諸宗教の代表へのあいさつ」2016年11月3日
13. 「民衆運動に関する第3回世界会議でのあいさつ」2016年11月5日
14. 「カフカス諸国のムスリム指導者と諸宗教代表との諸宗教対話会議におけるあいさつ」バクー、2016年10月2日参照
15. 「アシジでのあいさつ」2016年10月20日
16. 教皇フランシスコ使徒的勸告『愛のよろこび——家庭のよろこび・教会のよろこび』90-130 参照
17. 同 133、194、234 参照
18. 「核兵器の人的影響に関する会議へのメッセージ」2014年12月7日参照
19. 教皇フランシスコ回勅『ラウダート・シ』230
20. 教皇フランシスコ使徒的勸告『福音の喜び』227
21. 教皇フランシスコ回勅『ラウダート・シ』16、117、138 参照
22. 教皇フランシスコ使徒的勸告『福音の喜び』228
23. 教皇フランシスコ自発教令の形式による使徒的書簡「人間開発のための部署の設立」2016年8月17日
24. 教皇フランシスコ「アレルヤの祈りでのことば」、ベツレヘム、2014年5月25日
25. アピール、アシジ、2016年9月20日

(訳注)

*相互確証破壊 (Mutual Assured Destruction, MAD) : 米ソ冷戦時代 (1960年代) に提唱された核抑止理論。米ソ両国が、自国の核戦力の非脆弱性 (相手の攻撃に対する残存能力) を向上させて相手の先制攻撃から自国の核戦力の一部が必ず生き残るようにし、報復攻撃で相手を確実に破壊できる第二撃能力を確保することによって、核攻撃を相互に抑止することができるとするもの (外務省「軍縮不拡散外交用語集」より)。

**この部署名の正式な日本語訳は未確定。

(カトリック中央協議会事務局訳)